動物園だより

No. 4

昭和48年4月1日発行

70周年によせて

京都市長　船橋求己

市民の皆さんから長く親しまれ、育てられてまいりました京都市動物園が、今日お陰様で70才の誕生日を迎えました。

この動物園は、京都市が地方自治体として生まれてから5年後、当時京都御所で挙行された皇太子（大正天皇）のご成婚を記念するとともに、学問・芸術の都に最もふさわしい文化施設として多くの市民有志の協力を得、明治36年4月1日に開園いたしました。

歴史を持っているということは、何ものにもかえがたい感慨をおぼえますが、日本では上野動物園に次いで古く、市立動物園としては最初のものであります。

以来、明治・大正・昭和の激しい世の移り変りと共に、よろこびも、悲しみもかみしめて、いつも新しく脱皮しながら成長を続けてまいりました。

今日の急速な都市の過密化によって私たちは自然に背をむけた日常生活をしいられている中で、心から自然を求めているのではないでしょうか。

このため、私はさきに市民の方々のご協力をお願いしながら100万本植樹運動を提唱して「みどり」のあるまちづくりを推進しておりますが、動物園の分野でもこのことを切り離して考えることはできません。

即ち、自然と隔絶されがちな都会人と自然を結ぶかけ橋としての動物園、動物と親しむことは人間本然の美しさ、こどもだけでなくおとなも素朴な心にかえれる、いわゆる人間性回復の場としての動物園の必要性を痛感せずにはいられません。

最近この動物園では、日本ではじめてのゴリラの繁殖にも成功し、世界的に貴重な動物、ヨーロッパバイソンもはいりました。市民待望の爬虫類館も今月には着工の運びとなり、内外の爬虫類、両生類、夜行性動物を集めて展示し、今秋にはオープンの予定で計画を進めております。

また、古都京都ならではの雰囲気をかもしだす園内には、誇り得る魅力があふれ、256種、1425点の展示動物の他に、いつの頃からかすみついた野生のキジバトやヒヨドリが梢のあちこちに飛びこうて、ここを訪れる人々の心をなぐさめてくれます。

このように常に市民に心のふる里の役割を果してきた動物園であり、郷土の先覚者が残してくれた現代にかけがえのない70年の輝かしい歴史をもつ遺産を、更に充実させ大切にしたいと思います。

ゴリラの子供（メス、20kg、2才、ミッチー）と市長

ウサギと子供達と市長（おとぎのくににて）

70年のあゆみ

（昭和初期の園内風景）

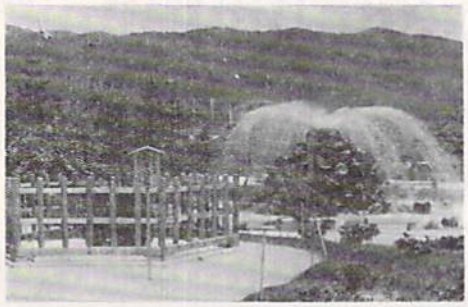
○開　園

皇太子殿下（大正天皇）のご結婚記念事業として、京都市が市民の寄付金と市費で建設し、明治36年4月1日（1903年）開園した。敷地34,088㎡。動物は宮内省から下賜のラクダ・タンチョウなど12種25点に、購入動物を加え61種238点であった。観覧料は大・小人とも2銭。初日の有料入園者は6,591人。当時としてはお祭りさわぎのような賑わいであった。

○お手植松

明治36年10月皇太子殿下（大正天皇）が、人力車でご来園になりご巡覧の後、噴水池西側の小丘に、30cm余りの赤松と黒松の2本を1株としてお植えになった。その後根本より13本の幹を分岐し、見事な夫婦松に成長した。

大正2年3月皇太子殿下（今上陛下）は、弟宮とご同伴にてご来園になり、鹿放養場前に五葉の松をお植えになった。これもよく成長し、本園の隆盛と歴史を語るよい記念物となっている。



（お手植松）

○珍獣の到来

明治39年12月ライオン1頭（上野動物園）40年4月ホッキョクグマ2頭・ライオン（メス）1頭・ダチョウ1羽（ドイツ・ハーゲンベック動物園）同年9月インドゾウ1頭（シャム）41年11月シマウマ・ライオン各1頭（ハーゲンベック）42年12月ヒトコブラクダ・カンムリヅル・フラミンゴ・アライグマ・ケヅメガン（ハーゲンベック）など続々と到着した。

○ライオンの人工哺育

明治43年2月ライオンが初めて4頭分娩した。しかしその内の1頭（オス）が間もなく鉄柵の外へ放り出されたので、鈴鹿畜養主任（後に4代目園長）夫妻が公舎内に於て人工哺乳で育てた。わが国でライオンの人工哺育に成功した第1号で、全国に名声を博したばかりではなく、飼育技術向上の足掛かりとなった。

（鈴鹿夫人と人工哺育のライオン）

○繁　殖

ライオンは有名で、明治43年から昭和12年までの27年間に21回53頭の子が誕生した。全国の動物園はもとより海外へも輸出し、カバとともに自慢のひとつであった。またタンチョウも明治36年宮家より下賜の4羽が、大正13年から昭和10年迄に8回で12羽を繁殖し、一時10羽収容（昭6.12）していたことがあった。

充実した当時の動物数219種948点（昭15.12）。

○第2次大戦末期

戦争がますます激しくなり、空襲で檻が破壊され猛獣が脱出したら危険であるということで、昭和19年3月、軍の命令により処分することになった。長年飼育していた動物を涙ながらに処分したのは、ライオン・トラ・ヒョウ・クマなど13頭であった。

また門（正・裏）の鉄扉、人止の鉄柵など資源回収のため木製に代替えされ、軍需工場から飛行機を避難のため搬入されたということも、この頃のことである。

○終戦当時

人々の食糧事情の悪化とともに飼料の入手も困難となり、動物も栄養失調となって次々と倒れていった。アシカ（19.1）カバ（19.3）ラクダ（19.6・20.1）シマウマ（20.9）インドゾウ（21.1）など。

収容舎は、市民の食料となるブタやニワトリ・アヒルが占め、見る影も無くさびれ、全部で63種268点（昭21.11）となった。

○進駐軍一部接収

昭和21年4月、南側疏水べり13,200㎡を軍用駐車場として接収された。撤去した主な施設は、チンパンジー舎、有蹄類舎（2棟）、鹿舎、猛獣舎（2棟）、熊舎、アシカ池、標本室、倉庫、便所、その他樹木多数。

○動物収集

日本動物園協会並びに関係者の努力によって、ようやく動物の輸入が始まり、昭和25年6月アメリカ・ホーグル動物園からライオン・ピューマ・コヨテ（各1頭）同年8月タイ国政府からゾウ1頭・ニシキヘビ2頭、同年9月商社を通じヒョウ・マレーグマ・テナガザル・ワニなど11種17点到着した。さらにクロヒョウ・アシカ・チンパンジー（昭26.4）など続々入園し、27年5月には2頭目のゾウ（ルバーヒ）がインド・ネール首相から市民に贈られた。

○博物館施設

博物館法が公布され、昭和27年4月この法律に基づいて本園は、文部省より博物館施設のひとつとして指定を受けることとなった。

○再建整備

昭和27年5月接収地返還となったので、再建計画がたてられ、27年度は造園とキリン舎、シマウマ舎、水洗便所を建設し、28年度ゾウ運動場、アシカ池、30年度猛獣舎、バク舎、33年度ホッキョクグマ舎を建設。市費多端の折であったが着々と整備された。

○おとぎの国

子供達が動物に直接ふれることができる場として、昭和30年4月に設置した。ここではロバ・ヤギ・リス・ウサギ・モルモット・小鳥・カメなどおとなしく親しみやすい動物を収容し、できるだけ放し飼いにしている。利用者が多く、入園者数を制限するというられしい悲鳴を上げている。

○姉妹都市と動物交換

昭和36年10月、アメリカ・ボストン市動物園から親善使節として、ビーバー2頭が贈られ、本園からオオサンショウウオ3頭、エゾリス2頭、シマリス4頭を贈った。38年11月、西ドイツ・ケルン動物園からエボシドリ4羽贈られ、本園からオナガキジ1つがい贈った。46年12月、ソ連キエフ市動物園へ、ニホンジカ及びタヌキ各1つがい贈った。

（ボストン動物園との動物交換）

○名称変更

開園以来「京都市紀念動物園」としてなじまれていた名称を、昭和39年4月「京都市動物園」と改めた。

○類人猿舎完成

昭和44年12月、ゴリラ2頭（昭35年入園ジミー・ベベ）・チンパンジー2頭・オランウータン2頭を収容した。この建物は、いくつかの特色を備えた近代的なもので、本園自慢のひとつである。

建築面積 470㎡（延 1,027㎡）
軒高 4m（最高トップライト 8.25m）
水堀 水深 2.1m　堀巾 5m

○繁　殖

シロテテナガザル（昭37）チンパンジー（昭39）ゴリラ（昭45）などの人工哺育に成功し、その他トラ12頭、ヒョウ5頭、クロヒョウ6頭、アシカ11頭、カバ6頭、キリン3頭、ベニイロフラミンゴ2羽、クロエリハクチョウ28羽などがあり、戦前以上の好成績をあげている。また日本動物園水族館協会から、繁殖賞の表彰も15回以上に及び、全国に名声を博している。

○自然保護

高山獣で特別天然記念物に指定されているニホンカモシカを、低地で飼育することに成功し、更に45・46・47年には繁殖に成功している。また傷ついたり、衰弱したりして本園に持ち込まれたシカやオオミズナギドリその他の鳥獣で、昨年中に保護したもの52種190点に及び、元気を快復したものは山野や海浜まで運び放している。

○近　況

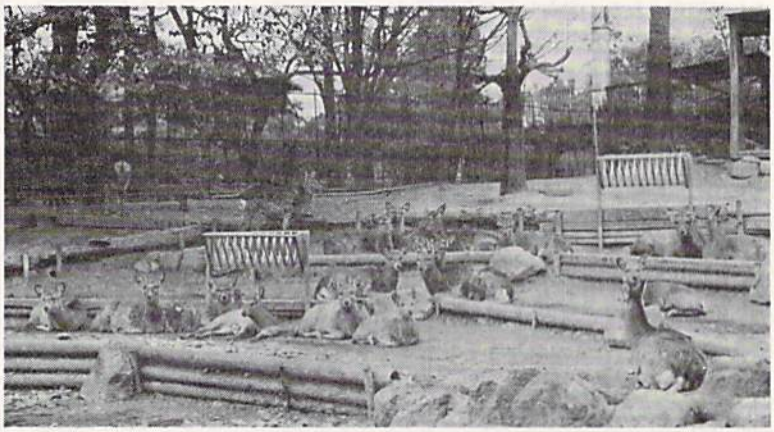
昭和47年8月1日から小学生無料となる。昭和48年1月、保護動物、ヨーロッパ・バイソンが到着。また今秋には爬虫類館が完成する運びとなっている。

自然環境の破壊がいちじるしく、公害問題で悩まされている今日、人間性回復の場として動物園の使命はますます重要性を帯びてきた。施設の充実を図り、空間はできる限り緑を多くして市民の要望に応えるよう計画を進めている。　（T. W）

現在　敷　地 40,209㎡
収容動物 256種 1425点（昭48.2.1）

鹿雑話

総勢19頭の一族……かぞえてみて下さい



4月にシカを話題にとりあげるのは、いささか季節外れの感じがしますが、当園には現在、総勢19頭の一族がおります。今月から来月にかけて、約10頭の赤ん坊が生まれる予定なので、この号にのせることになりました。

ニホンジカには、本州にすむホンシュウジカ、屋久島には稍々小型のヤクシカなど、すむ地方によって数亜種があります。当園のはホンシュウジカです。

漢字では鹿と書いて、シカ又はシシと読ませていますが、漢音ではロクと読んでいます。馬鹿とか馬鹿野郎とは常々口にする言葉ですが、この場合はカと読ませています。漢音では、馬鹿はバロクと読ませるのが正しく、本当の馬鹿は、梵語の慕何（痴の意）に由来しているという言語学者の考証があります。

中国の故事には、秦の二世皇帝が大層愚鈍だったことを良いことにして、時の宰相、趙高が自分の権力を試そうとし、皇帝の前で鹿を指さして、これは馬ですといったところ、家来たちも趙高の権力におそれをなしてロを合せ、そのとおり、それは馬でございますといったということです。〝鹿を指して馬となす〟から馬鹿という言葉が出たとは馬鹿馬鹿しい話ですが、落語の〝鹿政談〟にもそれに似たような話があり、あやまって殺した春日大社の神鹿のために、正直な豆腐屋が、本来なら死罪に問われる処を、その情状を酌量した、後の江戸町奉行、大岡裁判官が、〝これはシカにあらず、アカイヌである〟といって、豆腐屋の罪をとりあげなかった人情話もあります。日本版〝鹿を指して赤犬となす〟というところでしょうか。

大変な横道からシカの話に入ってしまいましたが、雑話ということですから、ついでに続けますが、馬と鹿の肝臓には胆嚢がないという共通点があります。

鹿という漢字にまつわる話をもう少し続けますと、麁の字はメスジカで、麚という字はオスジカのことだそうですが、キリンとは実は想像上の動物で、麒麟と書き、どちらもオオシカのことを指しますが、麒はメスで、麟はオスということです。

麓は林の下に鹿を書き、ロクとも読み、後述の逐鹿と同様、禄との関係から、山林を守って月給を貰う今様山林警備官を指す官吏のことでした。

麗という漢字にも鹿がついていますが、漢字の起原（角川書店）によると、丽は群の意味で、鹿が食べものを見つけた時に群れで走る様子を意味するのであるという解釈がなされています。シカが群れをなして走る様子は確かに見事でしょうが、奈良以外の土地で、そのような光景を見ることは不可能でしょう。

美人のことを麗人ともいいますが、獲物を見付けて走る女の人の群れという妙な解釈をつけると、さしずめ、特売場での御婦人方は、この麗わしき光景を見せてくれることでしょうし、家族のため、家計のための一途な想いは、まさに麗人というにふさわしく、頭の下る思いがします。

逐鹿という語は、鹿は禄につながるところから、鹿を皇帝の位にたとえ、その位を相争う意味があり、中国式の選挙戦というところなのでしょう。

昭和47年11月1日発行の50音別電話帳を見ると、頭に鹿とつく姓の方が49人あり、鹿田さんが16人、鹿野さんが15人、鹿間さん6人、鹿谷さん3人、鹿乗さん、鹿山さんが2人ずつ、鹿肝、鹿瀬、鹿戸、鹿内、鹿沼さんが各々1人となっています。

ご承知のように、シカのオスには角が生えますが、1才では1本角、2才では枝が1本増えて又状になり、3才では更に枝が2本増えて三つ又四枝になるという当園の飼育係、K. T. の観察記録があります。太さや枝の数は年令の他に、栄養状態に左右されること

も多く、深山にすむものと、森林にすむものとでは、左右の角の間隔に差が見られ、後者の場合では障碍物をくぐりぬける必要からか、その間隔が狭くなるといった研究や、後あしに怪我をしたりしてビッコになると、悪い方のあしとは反対側の角が畸型になるという研究もあります。

角が生えるのは男性ホルモンの働きなので、メスには生えませんが、前の年の古くなった角は、3月から4月になると、下から新らしい角が生えて来るため、ちょうど枯葉が散るように落ちてしまいます。これを鹿の落し角といって、この時にはそれ程出血もしません。新らしい角には血管や神経が走り、盛んに栄養が送り込まれ、おとなのオスでは約150日で完成します。

発育途中の角は大層軟らかく、傷つき易いので、オスもこの時期にはおとなしく、角を大事にしている様子がうかがわれます。そんなことで触るチャンスはめったにありませんが、触ってみた感じでは、ビロードに触れるような、なんとなく油がつくような感じで、大変暖かいものです。この状態のものを袋角といい、どれ程の効果があるのか分りませんが、漢方薬にはこれを乾燥させたものを鹿茸（ろくじょう）といって強精用として珍重しています。もちろん男性用として使用されます。

去勢をされたオスジカでは、角は生えて来ないか、生えて来ても袋角状の変形したもので、硬くはなりません。

メスジカは、早いものでは満2才で子を産みはじめますが、子鹿は明るい茶色に白い斑点のある、いわゆるカノコ模様をしています。この色は、木の間越しに差し込む太陽光線を巧みに利用した保護色で、生まれ落ちて間もない頃は、オッパイの時間を除いては、木の根株などで眠りこけている子鹿にとっては、最高のヘンシン忍法となっています。当園のシカですら、生まれ落ちてから10日間位は、毎日探し出すのに苦労する程です。この色は親にとっても保護色となる夏の粧いなのですが、昭和41年10月14日に生まれたメスの子鹿は、秋でもカノコ模様で生まれ、他のシカ達が目立たない冬毛の色に変った中で、一きわ目立った存在でした。

母親は大変子ぼんのうで、わが子に近づく敵には猛然と立ちむかい、前あしで叩いたり、かみついたりするので気をつけたいものです。子鹿の体は母親がなめてきれいにしてやりますが、あまりの可愛いさになめすぎて、耳をなめてちぎりとってしまったり、肛門から腸が出てしまうこともあり、盲愛型の母親もいます。これは飼育下のひずみなのでしょうか。

左京区の東山には鹿（しし）ケ谷という地名があり、今では大層開けていますが、昔は鹿（しし）が沢山すんでいたのかも知れません。今でもそこに程近い修学院離宮には、数頭のシカがすんでいて、植木を傷めるといって離宮では悩んでおられるようですが、野生のシカが庭の中で遊んでいること事態、当節としては羨ましい程の環境ではないでしょうか。

京都は三方を山に囲まれ、自然環境にも恵まれているせいか、毎年、何頭かの傷ついたシカが動物園に運び込まれます。野犬に咬みつかれて息も絶え絶えのシカ、車にはねられて骨折したシカ、そのまま山に追い込んでやれば良いのに、寄ってたかって捕え、がんじがらめに綱でしばられたシカ、トンネル工事の現場で墜落したシカ等々です。重傷を負ったシカは、多くの場合、治療も看護も役に立たず、大きな黒い瞳をうるますばかりです。

昭和46年5月18日に捕まった若いオスジカは、左京区大原で3頭の犬に追いたてられ、折よくそこで建築工事をしていた若い大工さん達に発見されて助けられ、大事に扱われて動物園に運び込まれました。早速、麻酔をかけて眠らせてから、レントゲン検査などをしたところ、野犬の咬み傷は深かったものの、骨折はなく、治療を続けました。約2カ月後、全治した幸運なこのシカは、7月20日、真夏の芹生街道を運ばれ、貴船神社の奥の山に放されました。又、その年の10月12日、宇治田原へ行く途中、宵待橋近くの路上で捕まったオスジカは、左の前あしの骨にひびが入っていて、歩くことが出来なくなっていたものでした。これも5カ月間の治療の後、昨年3月16日に綴喜郡井出町の山林に放されました。

喜んで山に走り込む　放されたシカ
（府.田辺事務所林務課提供）

喜々として山の中に駆けていく姿を見ていると、どうか元気に暮して欲しいという願いが胸中を走ります。こういうことも動物園の一つの仕事となっています。

（A.T.生）

❀動物豆知識❀

鳥のディスプレー

『求愛行動』

春、私たちだけがうきうきする春ではありません。冬を耐え抜いた草木、昆虫、魚、鳥そしてすべての動物たちが一斉にとびはねる季節をむかえた園内の動物たちも、この時期にあわせて、出産や産卵のピッチを一層はやめています。

番の形成から交尾・営巣・産卵。そしてこれらをスムーズに進行させるためのさまざまの求愛行動のディスプレーが園内のあちこちで展開されています。既に営巣をはじめているシュバシコウの雌雄が毎日絶えまなくクラッタリングの合唱をくりかえしています。まず翼をこきざみに震わせ、首を低く前方にのばし、ついで後方に首と頭をそらし、その背中にぴったりとつけながら嘴をカタカタとならすのです。同じコウノトリでもセイタカコウはちがいます。地面に垂直に嘴をさげたままクラッタリングを続けます。いずれも長く伸した首が敵意のないことを示す姿勢となっています。なぜなら彼らの攻撃の姿勢すなわち魚をとる時の首の姿勢―S字型―とはまったく反対の姿勢だからです。しかしこの求愛行動にも目立たなくなっているとはいえ、攻撃の衝動が含まれています。行動学的には求愛行動は攻撃と恐れの衝動からなりたっているといわれています。たとえばクジャクが飾羽を拡げることは害敵に対して自分の体を大きくみせる最も攻撃性の強い姿勢と考えることもできますし、雌を前にして足ぶみしながらくるりと反転し、お尻をみせ左右に移動することは恐れの衝動のあらわれとみることもできます。いずれにしても、動物たちの求愛行動を攻撃、恐れその他の日常的な行動単位に分解し、そのディスプレーの起源をさぐる研究は、今後の重要な課題となっています。

繁殖の進行

≪できごと≫

☆1月1日

「鹿雑話」にもでていますが、修学院離宮で、足の骨が折れているオスジカがみつかりました。今年の元日は相にくの雨降りでしたが、当園の職員8名が夜の7時までかかり、びしょぬれになりながら、動物園までつれて帰り、治療をしました。

☆1月10日

待望のヨーロッパバイソン2頭（オス・メス）が到着しました。名古屋の動物検疫所で1カ月の検疫の後、搬入されたものです。ヨーロッパバイソンは、生息数が大変少なくなっているので、絶滅させないように厳重に保護され、1頭ずつ国際登録されています。繁殖が待たれます。

☆2月8日

猿ガ島では今シーズン第1号の子供を「ジーアイ嬢」がうみましたが、残念ながら早産でした。ひき続き夏までには、約20頭の出産が予定されています。

☆2月13日

当園で生まれたゴリラの子供「マック」は、生まれた時から先天性の鼻涙管閉塞で困っていましたが、幸い眼科医の協力が得られ、手術が行なわれました。予後も大変良好で、長い間苦しんでいたことがウソのように、すっかりよくなりました。

☆3月1日

卵から鳥が生まれでる様子をみていただこうと準備をすすめていた孵化育雛舎の孵卵器が、順調に働きだしたので、展示をはじめました。正門を入って左前方、小鳥舎の東側です。

☆3月9日

ホンドキツネが生まれました。キツネの母親は大変臆病で、少しでも巣穴をのぞくと赤ん坊をくわえて場所をかえてしまい、このため、昨年、一昨年と失敗してしまったので、今年は巣穴をのぞかないように、そっとしてやっています。　（Y）

■ 第5号の発行は、8月1日の予定です ■

動物園だより　No.4　編集・発行人　林田礼俶
発行所　京都市動物園
京都市左京区岡崎・岡崎公園内　TEL 075（771）0210・0211